



TITLE:

総合討論2 (地域経済研究会ミニ・シンポジウム「企業都市」研究の到達点と課題)

AUTHOR(S):

岡田, 知宏; 宇都宮, 千穂; 山縣, 宏之

CITATION:

岡田, 知宏 ...[et al]. 総合討論2 (地域経済研究会ミニ・シンポジウム「企業都市」研究の到達点と課題). 資本と地域 2010, 6-7: 101-108

ISSUE DATE:

2010-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/139221>

RIGHT:

<ミニ・シンポジウム>

総合討論Ⅱ

【岡田】

ご報告ありがとうございました。

私の方も著者の中野さんとは面識がないのですが、ご本人から本を送って頂きました。今、京都工芸繊維大学の学振の特別研究員ということで、37歳という方です。筑波大学の藤川昌樹先生のところで、都市計画の関係を学び研究して、その後は京都工芸繊維大学の中川先生の元に行かれたということです。以前は、社宅研究会が出版した本と一緒にあってまとめたりもされていて、社宅とか福利厚生施設に興味があるのかなという感じがしました。

これまでの、都市経済史あるいは日本経済史という視点から見ると、都市計画分野の研究が出てきたということで刺激もありますし、学際的な分野でもあります。まず皆さんの方から書評者の宇都宮さんに聞きたいことがありましたら、ご質問いただきたいと思います。その上でまた前半の議論と合わせて全体討論に移っていききたいと思います。

【水野】

都市計画に企業が貢献した場合は、税制面では何か優遇されるのでしょうか。言ってみれば、なぜ指定寄付金制度というものを当時は活用したのでしょうか。

【宇都宮】

税制に関しては記述があまりありません。そもそも道路を作るというのは、本来税金で作るべきなのですが、そうせずに企業がお金を出して作ることによって、企業の利益が上がるというそういう考え方です。特に野田と倉敷の場合はその傾向が強いです。

【岡田】

当時は税の優遇措置はなかったのでしょうか。今は優遇措置がありますけれども。

【宇都宮】

あまり分らないですね。

【岡田】

そこは研究しなければならないところですね。本来、色んな人の民有地を買収して、まっすぐな道路を作るわけです。私的企業にはこれが出来ません。とても費用がかかりますので。だから、私的企業はスポンサーとして公共団体にお金だけ渡してしまって、後は公共事業としてやっていく、というようなやり方をすれば非常に簡単に道路が作れてしまう。自分の企業活動がしやすいかたちでできるので、便利な手法です。1980年代以降の日本で、民間提案型の公共事業というのが展開しますが、その先を行っているような事例ではないかと思います。

【三輪】

グンゼの道路とかもそういう感じなんですかね。

【岡田】

グンゼは、元々地元の人たちが出資して作った会社です。公的なところで一体どれだけ優遇されているのか、私自身は知りません。宇都宮さんは、知っていますか。

【宇都宮】

いや、知らないですね。税制は明治から大正、昭和にかけて大きく変わっているので、なんとも言えないですね。

【岡田】

綾部のグンゼ工場は、駅の真ん前でしょう。あの土地をどうやって確保したのかが、知りたいところですね。区画整理をやったとすれば、おそらく公的なところとの関係性が強いということになると思います。

【山縣】

この本の著者の方は、産業遺産の研究者の方ですね。産業遺産や都市計画の研究の中で、企業城下町研究というのがどういう位置付けにあるのか、どういう学問状況があってこの本が書かれているのかを教えてください。

【宇都宮】

中川先生をはじめ、建築を背景にした歴史研究をされている方が結構いらっしゃるって、その方たちは社宅に注目されたんです。社宅

の間取りを調べたり、いわゆる戦前の社宅は高級住宅街みたいになっていて、すごく珍しいものだったんですね。それが今でも残っている。それを保存しなければという意図が最初にあります。それがあってか、学問的興味で社宅が面白かったのが先か分からないですが、社宅研究というのが結構あって、色んな本が出ています。中野さんは、この本を読む限り、野田と日立ではなくて、倉敷から研究に入っているんです。修士論文では倉敷について書いています。倉敷は大原孫三郎が作った文化的な都市ですが、そこに興味があって、福利厚生施設の社宅がその都市に出来ていく過程というのを見て行ったらいいんじゃないかというのがありました。今、産業遺産を残すかは企業の意思にかかっているわけです。企業が潰すと言ったら潰すんですね。潰さないためには、それが価値あるものだと認めさせなければならない。さらに、産業遺産というのは一個一個残しても意味がなく、例えば社宅、煙突、工場も全部残すことで初めて地域の資源になるという考え方です。こうした研究を通して、住民にも企業にも産業遺産の価値を再認識させるという意図があるようです。そういう意図の中でこの本が書かれているので、どうしてもそういう施設ばかりを取り上げるという傾向があるというふうに私は認識しています。

【池島】

生産システムとして捉えるという視点が、経済史研究者の中にあまりなかったということでしょうか。

【宇都宮】

福利厚生施設が話題にのぼるということが、あまりなかったという事情があります。

【名和】

福利厚生施設とか住宅施設としては、少しずつ改善されていることが示されているのですか。

【宇都宮】

野田でも倉敷でも、それは言っています。野田の場合は、酒造業と同じで最初はどやみtaiなところに醸造する人を住まわせていたのですが、労働運動が起こって、その過程の

中できちんとした宿舎を作る。産業近代化の中で、その社宅もどんどん近代化していった、労働者の住環境が整備されていったという記述はあります。倉敷に関しても同じで、大原孫三郎は業績を上げるためには労働者に奉仕するという考え方だったので、社宅が特徴ある新進的なものができて行ったということを言っています。野田の場合は評価がないんですけど、倉敷の場合だと、大原美術館などを指して、大原孫三郎の全体的な工業都市計画によって文化的な都市が出来たという評価です。

【名和】

それは20世紀に入ってからですかね。20世紀の前半期の中で、階級間対立を言い忘れるとか、そういうことはないんですか。

【宇都宮】

多分、あると思います。

【岡田】

ご本人にはそういう視角はないと思います。都市計画の畑の人だから、それは私たちがどう読み込むかということになるでしょうね。経済学的、経済史的に見れば当然階級的なものがあるだろうし、大原孫三郎は日本のロバート・オーウェンですからね。本当に先進的な工場を作り、社宅を作り、かつ労働科学研究所とか大原社研を作り、それは今も残っています。開明的な資本家ですよ。そういう人たちが倉敷市に対して、圧力を加えて都市計画道路的なものを作って行ったという。これ自体は、もうひとつの面白い側面だなと思います。

【山縣】

本書には、企業城下町の検討視角として、社会的インフラや都市的生活をどういう風に企業が成り立たせてきたのかというのがあるけれど、何をもって都市形成というのかが明確ではないと思います。例えば社会的インフラの定義についても整理がないので、そこをもう少し検討する余地があるのではないのでしょうか。

【宇都宮】

多分、そうです。

【名和】

都市工学の発想では、ものを計画したり整備したりするときにコスト意識をあまり持たない。だから、財政負担をどうするのかとか、あまり考えない人が多かったのではないかと思います。この本にはそういう視点はあるのでしょうか。

【宇都宮】

あります。法定都市計画というのが出ます。たいてい私的な都市計画があって、次に法定都市計画で国がやれというかたちですね。たいていの市町村は大風呂敷を広げて都市計画を作って、これも建て、あそこに道路を引いてと計画するのですが、そのときはもう企業がないので出来ません、という状態だというふうに書いてあります。つまり、企業がいれば、企業が財政出資をするんだけど、そうじゃなければ出資しないということです。そこが私的な都市計画と法定都市計画の違いですね。法定都市計画だと都市計画税でやらなければならない。企業から寄付という方法もありますが、法定都市計画ができる頃には企業は衰退気味になっていたり、移転していたりするので、財源がないということです。そこで私的な都市計画と法定都市計画のどちらに効力があつたのかということと考えたときに、地方都市の都市計画は法定都市計画よりも私的な都市計画、いわゆる企業が作った都市計画のほうに効力がありました。それをもって、日本の近代都市計画は企業がやったと言わる訳です。

【岡田】

企業城下町の都市計画というのは、著者自身がかなり偏った事例だという認識をしています。その事例を通して言えることは、先ほど宇都宮さんが整理したような形です。実際、法定的な都市計画事業は絵に描いた餅で終わるところが多いようです。実際に道路が作られたとか、用水が引かれたら、やはり工場の周囲というようなことになっていく。そういうメカニズムがあつたということ自体は明確に示したということで、意義があつたと思うんだけど、ただそれがどこまで一般化できるかと言えば、それは自ずと限界がある。

【三輪】

野田の場合ですが、醤油というのは昔は土地ごとに味も違うし、材料の違いで地域性が現れる食品であって、生産拠点は分散していた。その後、キッコーマンがひとつのスタンダードを作り、野田に生産拠点を集中していったというのが一般の認識ですね。これは戦後の初期位だと聞きましたが、戦前期にも既に野田のキッコーマンは全国企業だったんですか。

【宇都宮】

千葉は醤油の産地で、銚子にも醤油産地があります。醤油というのは本当に地域性があって、例えば、小豆島でも醤油を作っています。醤油は農閑余業だったので、味噌とかと同じレベルのものです。今回、私はこの書評を書くにあたって、野田に通いました。そこはもうコンビナートみたいになっていて、パイプ産業ですよ。野田のタンクがあつて、線路の下を管が通っていて、こっちから大豆が流れてくるというシステムが出来ていたんです。これも、デルモンテとかいろいろ合併してしまっていて、要は、アグリビジネスですよ。大豆はほとんどアメリカ産です。これを見ると、本書の捉え方はどうなんだろうと感じたわけです。企業城下町だというのは、この時期を切り取れば確かにそうかもしれないですけど、資本はどんどん展開してきます。ある時期の道路整備や学校整備を取り上げて、企業城下町というのがこういう形で出来た、というのを証明することが果たして適切かということも感じました。それは倉敷も同じで、倉敷にはこの後、クラレが出来るんです。しかも、クラレの方が倉紡より大きいんです。でも、クラレの言及が一切ない。そういう限界がこの本にはあると思います。

【名和】

今でもキッコーマンは日本国内でかなりのシェアを持っているので、道路整備は野田の道路整備だけでなく、全国的なネットワークもあると思います。その点は特に言及はないのですか。

【宇都宮】

ないです。企業城下町の形成をどう捉えるかということですね。資本がどんどん展開してきて、倉紡の場合は大阪に移動してしま

います。そういった時に企業城下町はどういうふうに捉えればいいのか、ちょっと分からない。もう少し捉え方を変えた方が企業城下町の形成は明らかになるんじゃないかなと思っています。

【岡田】

これから残り時間で、総合討論に入って行きたいと思います。シアトルという単一都市の産業交替と都市経済構造の変化を、山縣君が追いかけています。宇都宮さんから報告があったのは、中野さんが追いかけた日本の近代都市の三つの事例で、そこに著者が生産システムと呼ぶ施設が都市計画という計画行政を通して配置されていく。その際に、企業、資本が、かなり大きな役割を果たしていたことが発見されていくわけです。最後に宇都宮さんが言いましたけれども、その後の展開過程まで、この話は適用できるのかという問題があります。企業都市研究なり企業城下町研究が、対象とする都市の構造そのものが100年以上にわたって、変わってきているわけです。それを都市形成論なり都市経済論という視点から見ると、どういう方法が一番妥当性があるのかという議論になるかと思っています。これは都市経済論にとっては、かなり大きな、自分の問題としてあるんじゃないか。他の皆さんも、それぞれの視点から見てご意見もあると思いますので、最後の議論をしていきたいと思っています。

【関根】

私は多国籍アグリビジネスと地域農業の研究をしています。近年、企業の社会的責任というのがアグリビジネス研究者の間でも盛んに議論されています。その企業の社会的責任という概念は、企業都市、企業城下町の形成の中でも議論されていると思うので、ひとつ質問したいと思います。山縣さんが先ほど言われたように、地域に住んでいる住民が生活できる条件や空間をいかに作るかが大事になると思いますが、そういったときに企業の社会的責任という切り口がどこまで使えるのか。もちろん行政や資本等、色々なアクターがいる中で、企業の社会的責任というのが、都市形成論の中でどう論じられているのか、「企業の社会的責任」が研究の切り口としてどこまで有効なのか有効じゃないのか、どのよ

うにお考えでしょうか。

【山縣】

企業の社会的責任というのは、国、文脈、時代によって変わってくると思います。例えば私の研究範囲で言えるとしたら、アメリカの場合は成功した企業とか成功した人がお金をだしてファンドを作り、社会貢献すべきであるということが昔から普通にある。シアトルの場合で言ったら、マイクロソフトは成功したので地元のグローバル・ヘルスの活動にお金を出しています。大学とか地元の図書館とかに直接アピールすることもあります。そういう意味では社会的責任を果たしていることが出来るかもしれませんが、私が取り上げたシアトルの事例で言ったら、マイクロソフトは独占的な地位を確保している。つまり、企業にお金があるからできるということにもなります。それから、企業の社会的責任というのは、シアトルの場合で言ったら基本的に居住条件が比較的良好な都市にさらにお金を出しただけなので、やりやすいと言うところがあったと思います。日本の事例で言ったら、公害問題の企業の事例もありますね。そこでの社会的責任は全然違いますよね。時代とか国とか文脈によって様々に分けて議論する必要があるだろうとしか言いようがないです。

【宇都宮】

企業がどう責任を取るかという点で思い浮かぶのが、夕張が財政破綻した時に企業が撤退して、社宅とか、全部維持不可能になってしまったという事例です。夕張は社宅、水道、ガス、電気、全部が企業持ちだったので、企業が撤退したら今まで住んでいた人の生活がガラッと変わる。水道代も年金代も払わなければならない。社宅の整備も企業が負担していたので、壊れてきた時の修理が問題になって、結局それは、北炭株式会社が撤退した時に、夕張市が全部買取ったんですね。そういう風になると、企業の責任は果たされていないと考えられる。私の研究に即して言うと、いわゆる社会的共同消費手段、電気、ガス、住宅とか風呂とかが、企業が調子のいい時は維持可能だけど、出来なくなると、行政に丸投げってことはいかんではないかというふうな。でも歴史上、企業城下町というのは割合

そういうことが普通に行われてきています。住友はずっと新浜にいたので、住友が新浜から撤退しないこと自体、社会的貢献だっていう言い方もされます。その一方で、やはり住民生活に焦点を当てると、社会的責任というのは、もう少し細かく見ていって、問われる必要があるのではないかと思います。私もまだはっきり頭の中で整理できてないですけど。山縣さんが仰ったみたいにアメリカには寄付文化があると聞いたことがあって、お金をすごく儲けた人は社会貢献をしなきゃいけないという雰囲気があるけれど、日本にはあまりないので、どちらかというと住友がやった寄付というのは、学校を建てたり、道路や港湾を作ったり、自分のためになるようなところを中心にやっていくんですよね。そういう意味では日米はちょっと違うと思います。今の研究状況からは、こんな感じです。

【三輪】

寄付にしても、寄付が落ちるところとそうじゃないところの地域の格差が出ますね。シアトルは確かに、競争力がすごいけれど、それで国内のバランスも大分変わるわけだし、それが本当にプラスになっているかどうか分かりません。最近よくあるのは、企業として立地する地域に対してはいろいろ貢献するけれども、国税とか法人税は下げるというかたちで、どう評価するのかという難しいところもある。

【岡田】

社会的責任論は歴史的に作られた用語なので、社会運動の流れの中で捉えるべきものです。寄付は古い時代からあって、日本でも直接蓄積に関わらない図書館寄付というものが、戦前あちこちでやっています。むしろ戦後消えていくことが問題です。個人所有の会社がなくなって法人資本主義の時代に入ってくることが、かなり大きいのかなと思います。

本論に戻すと、僕は都市経済の形成過程が、資本主義発展過程の中でどういう段階に位置付けられるかということがあると思います。もう一つは、どういう技術構成、産業、企業なのかという問題があります。山縣君のシアトルの事例が面白くて、造船から始まって、航空機、そしてIT系が入ってくる。それぞれが特有の技術的構成を持っています。必要と

する労働力も違う。当然生活様式も違ってくる。そうすると、生活に必要な社会サービス機能が違ってくるんですよね。生産のところと生活のところ、そういう変化ですね。生産力も技術的側面によって変わってきて、それが生産活動を繰り返すことで社会的連関性を作っていく。それは単に価値的側面ではなくて、素材的側面を作っていく。こういう形で都市は作られていくと私は考えています。

野口君が最初に論点を出した宮本さんの容器としての都市論に私は否定的です。実は、容器も資本が作ってきた。つまり固定資本自身もそうだし、コンクリート会社、鉄鋼会社ができて初めてコンクリート都市ができるんです。特に資本主義の初期以降、都市そのものが資本によって作られてきたものとして捉える必要があるのではないかと思います。

もう一つ大事な視点は、今回取り上げられた本社工場の所在地の問題です。本社が合併等々によって、子会社化して、分工場化してしまったら、拠点は域外に行ってしまう空洞化が始まってしまうんですね。私が四日市で問題にしたのがその点です。三重紡績の本社工場が、大阪紡績と合併して東洋紡に移ってしまう。そうしたら分工場都市になってしまって、紡績工業に代わるものを誘致するようになる。それで、石油化学コンビナートの元になるような海軍燃料廠の工場等を持つてくる。それが四日市地域の漁業を潰し、且つ後に大気汚染の源になって行きます。

その資本蓄積の投資決定はどこにあるかが問題になります。それが、恐らく行財政、政治過程を通して、都市の政策に反映していく訳です。あるいは例えば都市計画というかたちで、時期毎に反映されていく。どこに道路を作るとか、どこに運河を作る、港湾をどれだけの深さを掘るのか。地域財界が要求して、それを取り入れる形で市政多数派が都市を作っていくという過程をたどって行く。

恐らく現代のグローバル競争段階とは違いかたちで、中野さんが取り上げた日本の三都市にもあるんじゃないかと思います。そういう視点から、都市史を捉えなおしたら、わりと私は見えやすくなるんじゃないかと思います。工業都市でなくても、例えば、山崎君が研究しているような宗教都市・伊勢は、戦時の新都計画で「神都」(日本はあそこだけなんですね)として強化するために大規模な国家

資金が投入されていくという、例外的な都市計画もあります。これは完全に内発的というよりは、国策的な都市形成ですけれども、そのような形で、産業都市以外の都市形成の要因をきちんと探ることによって、独自の姿をもった個別都市が、どうやって生まれてどういう形で変わっていくのかが見えてくるんじゃないかと思うんです。

【池島】

山縣さんは、どちらかと言うとシアトルの移り変わりを見ている中で、企業に焦点を当てていますね。その時に企業が都市を作ったというところが見えるかどうか、またその企業以外のアクター、大学とか他のアクターを取り上げられましたが、それ以外の経済外のアクターがシアトルという都市を作り上げている要素が、アメリカにもあるのでしょうか。それと、アメリカで都市を作るという時の資本以外の役割はどういうことになるのでしょうか。日本との違いが明確にあれば、教えてもらいたいです。

【山縣】

私はシアトルの都市計画の全体像を描くことではなくて、シアトルの産業再編を企業レベルで見ているということなので、都市形成の全体像を説明するということは課題としていないということですね。何故そうなったかと言ったら、それは一つの焦点になるのですが、先ほど中野さんの話を聞いていたら、企業が私的な都市計画を実施して、ある企業の生産システムに見合った都市を作ったという説明が成り立つ位、企業都市の諸々の工場関連施設、福利厚生施設の創出がある種一致して捉えられる。シアトルの場合、港湾都市から始まっていて、そもそもボーイング社とは独立したところで、全体的都市形成が進んできて、そこにボーイング社が入って来てボーイングの世界を作るといって、都市形成との関係はそういう形になっていると私は思っています。

【富樫】

企業とコミュニティがぴったりっていうのは、何もない鉱山都市なんかだけだと思います。やっぱりどの国でもそうなんじゃないですか。会社しかそこにいないし、それが労働者

を集めて、都市かは分かりませんが人口の塊をつくるし、それがその公園、学校、全部揃えないとやっぱり基礎が成り立たないんですね。それはどの国でもあるかもしれないです。城下町というのは、戦国大名とかがきちんとした都市計画を作るんですね。もちろんお城の真ん中は武士、商人も配置するし、街路も全部綺麗にする。明治維新で武士はいなくなりますので、その後いったん衰退した都市がもう一度再生する時に、今度は企業が入って来る。ただ日本の企業の社長や工場長が直接市長になって丸ごと地域を支配することは、悪いことではありませんが、ちょっとないと思います。裏で色々やることはあるんですけども。でも、その地域の住民なり、周りが企業城下町だと思ってしまう。企業としても、色んな基盤整備をしなければ、産業活動もできません。当時の財政からいえば、学校建設から何から全部やらないといけないので、やるわけですね。でも今みたいに、行政が税金をもって全部やるわけには行かないので、小学校を維持することすらもう一杯一杯です。そこで、民間がやらざるをえない。宇都宮さんが紹介した企業都市というのは、そういう都市ですね。その後、成長時代に企業と都市や地域がだんだん離れていく。政治的にも組合があつたり、政党があつたりして、だんだんずれていく。ましてや地方都市でもそれは変わっていくし、工業都市研究で言えば皆そうなんです。皆ずれてしまって、企業対都市の関係がだんだん見えなくなっていく。相変わらず残っているのは、歴史的研究としての企業城下町研究しかもうなくなってしまった。そういうふうな企業都市や企業城下町研究はどういう意味を持つのか、ちょっと悩んでいました。ただ、ガバナンスと言った場合、企業も組合も住民も都市のステークホルダーだから、都市を作る時にどの部分を担うのか。企業は企業で当然利益を追求するんだけど、社会貢献を要求されるかもしれない。

【宇都宮】

その通りですね。ただ、企業城下町研究は、住民生活の研究を考えた時に必要だと考えています。産業空洞化で、都市が経済的にまわらなくなってきたっていう研究は掃いて捨てるほどあるのですから。そこで、住民の生活をど

うするかって言うところになると、なかなかの確な議論がないように思います。宮本先生の社会的共同消費手段以降の研究が、私たちの立場からではなく、それをやるのが古いとか意味がないとか、考え方の違いももちろんあるので、私もその疑問を持ちながら、やっています。ただ、もう少し突き詰めていく必要があるかなというふうには感じています。儲からない部分は企業にやらせようと言って病院などが民営化されていますが、そういう手法で都市住民の生活を維持できるのかと言う問題があります。それではどう維持すればいいのか、過去どういう風な形で取り組まれて来たのか、検討していく必要があると思います。そうしないと同じことが繰り返されてしまうので。

【岡田】

単一の企業で維持されている都市は殆ど見られなくなってきました。おそらく都市が成り立っているのは何らかの産業があり、そこで、生活ができるからなんですね。再分配の装置として自治体がある。産業の構造がどういう形でどういう経済的担い手がいるか。もちろん、資本が一番中心だけでも、京都には多国籍企業も一部ありますが、中小企業の方がはるかに多い。しかも今は病院業が、一番大きな雇用規模を誇っている。こうした中で、如何に生産的な活動と消費的な活動が再生産されて行くのか、そこにはどんなメカニズムがあるのかと言うのは、実はあまり明快な形では研究されていないと思います。実際にそれらがどういう形で繋がって循環しているのか、あるいは再生産されているのか。そのところの構造的な研究がもっとやられるべきではないかと、私は思っています。都市経済あるいは都市形成史研究が、これから解明すべき点ではないかと思っているわけです。

【高山】

理論的な部分では、やっぱりまだまだ解明すべき論点がたくさんあるのではないかと思います。要するに、資本って言うのは企業とイコールではないので、産業や生産力の技術的あるいは有機的構成とか色々ありましたけど、資本と言うとつい企業っていうふうに変えてしまうくらいがあるのですが、その辺り

の定義の整理から、丁寧にした方がよいのではないかと思います。

【野口】

僕自身、非常に勉強になりました。思ったのは、アメリカと日本が区別されて、企業都市論、資本に依存した形の都市のことをプロは扱っていますが、都市はやはり資本よりも歴史が長いですね。考えるべきなのは、企業や資本に依存しない生活の再生産を大切にすることではないでしょうか。

【宇都宮】

その通りだと思います。例えば、ノルウェーの農村は過疎化しているところが多いのですが、人は住み続けて、都会に行ってもまたそこに帰ってくる。都市と農村は裏表の関係ですが、その関係がずいぶん違うと聞きました。資本と都市ということで見えていくのか、もしくは、もっと別の見方があるのか。それこそ、実証を重ねていく必要があると思っています。

【岡田】

企業という言い方で、全て括ってしまっているのかという問題をすごく感じています。企業城下町という言葉は分かりやすく、一つの大企業が都市計画を含めて、トヨタのように決定的に関わっていくというイメージですね。でも中小企業も企業です。イタリアも職人企業という言い方をしています。私は再投資主体をもっと広げてとらえています。NPO法人、協同組合、地方自治体だって、擬制的な資本投資行為を行います。毎年それが再生産されて、所得が循環し、暮らしが成り立っていく。そういう関係なんですね。ある一定の都市空間のところで、意識してもしていなくても、それが繰り返されていく。そういう地域内再投資の枠組みで捉え直したら、あらゆる都市は企業都市なんです。そういう側面と生活をする生活都市の側面が当然ある。むしろその再生産の特徴なり個性が持続可能かどうかは問題です。また、環境問題や公害問題、産業空洞化問題に対して、柔軟に対応できるかどうか。そういう点に注目しないと都市政策としては持続可能な政策提案になっていかない。企業全てを否定するような形になってしまい、主要な担い手の一つである、

病院、農協あるいは中小商店から何も力を引き出すことが出来ない。そういうところの投資活動にいかに関わっていくか。大企業の行動は良く見える。そればかり追いかけて、企業城下町研究という形で進んでいくけれども、そうではなくて、普通の都市がどうなっているのか。大都市の複雑な要素はどうなっているのか。これらをはじめ、本当に解明すべきところがたくさんあると思います。

これで、研究会は閉じようと思いますが、最後に山縣君と宇都宮さんからまとめの発言を、今後の自分の研究方向にも触れてもらいながら言ってもらえたら有難いと思うんですが、いかがでしょうか。

【山縣】

今日色々ご指摘頂きまして、かなりヒントを頂きました。先ほど申し上げようかと思ったんですが、企業の社会的責任という議論か、あるいは持続可能都市政策という話になるのかもしれませんが、アメリカの場合、いきなり小さな企業が巨大企業に成長していった、シアトルで言ったら、国際的な企業ですね。シアトルの場合、住民運動があって、そこがシアトル市のレベルで労働運動もやっている。それが都市の活力や元気になったところもあるし、何らかの形で都市を構成している。それが、色んな巨大企業や中小企業との関係で、どういう構図、構造として捉えられるのかが

おそらく課題になると思います。それが、ずっと議論されてきた持続可能な都市政策とか、どういう企業都市かという問いに対する回答にもなるかなと思います。

【宇都宮】

今、博士論文を書いているところです。「初めに」の部分はどうするか、私自身はちょっと困っていたので、シアトルの話も聞けて、議論してもらって良かったです。以前、私が院生の時、アメリカと日本の都市は全然違うので、議論の仕様がなくてよく言われていたので、今回一緒に議論できて、すごく良かったです。交流ができて、すごく楽しかったです。私は高知市の産業空洞化の研究をしています、その過程の中で人が住めなくなっていくという研究をしています。そこで何が必要なのかというと、企業都市の生活空間を見つけていくことでしょうか。そこにまた別の新しい何かがあるかもしれない、それを見つけるきっかけになればいいかなと思います。

【岡田】

はい。どうもありがとうございます。